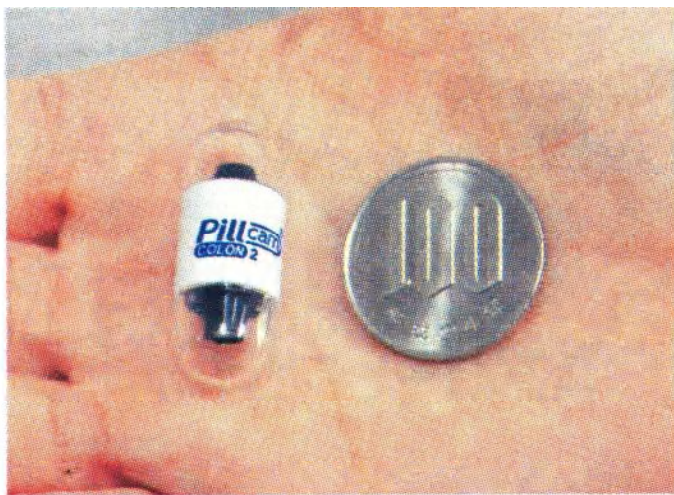


大腸用カプセル内視鏡

製鉄室蘭病院が導入



製鉄記念室蘭病院が導入した「大腸用カプセル内視鏡」。道内医療機関では初導入という

がん早期発見期待

室蘭市知利別町の製鉄記念室蘭病院（松木高雪院長）は、「大腸用カプセル内視鏡」を導入した。道内医療機関では初めて。「口から飲み込む」だけとあって、大腸内視鏡検査と比べると、精神的・身体的な負担が少ない

という。大腸がんの早期発見や予防にも大きな期待が集まる。

大腸用カプセル内視鏡は、直径が約1・1センチ、長さが約3・1センチ。小型カメラとバッテリー、発光ダイオード（LED）光源を内蔵する。医療機器の承認を受けた今年7月以降、国内でも徐々に普及が進んでいる。検査では、カプセルを口から飲み込み、約

10時間後には肛門から排出される。毎秒最高35枚のスピードで大腸の腸管内を撮影して、画像は腹部に張ったアンテナからデータレコーダーに転送される。医師は、パソコン画面に読み取られた動画に近い画像を確認し、診断する。

同病院では、2008年（平成20年）に小腸用のカプセル内視鏡を導入済み。大腸カプセル内視鏡を用いた検査は12月から保険外診療（10万円程度）として実施する予定。来年1月以降は、公的医療保険の対象となる見通しという。

第3位。患者数の増加だけでなく検査ができる簡便な方法。患者の負担も少ない」と説明。その上で、「大腸が

日本カプセル内視鏡学会指導医の前田征洋副院長（消化器・血液腫瘍内科）は「肛門からファイバーを挿入する大腸内視鏡検査では、恥ずかしさもあったり敬遠する人も多い。カプセル内視鏡は、飲むだけで検査のメリットを強調している。」

（松岡秀宣）

道内のがん部位別死亡者数（2011年）によると、大腸がんは女性で第2位、男性で